北海道医報
ISSN 0913-0217　2022.3.1. 第1242号
発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円（税込）

節風季

人の寿命と人生の閉じ方

情報広報部長　橋本（はしもと）　洋一（よういち）

人生100年時代を迎えたとよく言われるが、正確には100年時代を迎えたわけではない。少し古いデータで恐縮ではあるが、令和2年の簡易生命表（厚生労働省）によると平均寿命は、男性81・64歳、女性が87・74歳で男女ともに過去最高を更新しているが、100年にはまだ程遠いのが現実である。

さまざまな分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬の登場で、がんからの生還者が増え続けているのは事実だ。2030年にがん死を0にしたいとの本庶教授の熱意と希望に満ちた言葉はがんと戦っている患者さん本人、家族の方々にとって頼もしく響くだろう。死亡原因第1位の悪性新生物を克服し、充実した人生100年時代に到達することが人類にとっての当面の大きな課題のひとつだろう。

ヒトの平均寿命の変遷を辿ってみると、世界文化遺産に登録された《北海道・北東北の遺跡がつくられた縄文時代の平均寿命が31歳で、その後ほぼ変化することなく経過し、室町時代になっても33歳に留まっている。江戸時代になってようやく45歳と40歳台となり、明治時代が43歳でほぼ横ばい。昭和22年には52歳。平成26年が80・5歳（男性）86・8（女性）と現在と大きく変わっていないが、右肩上がりで伸びてきた。以上の数字は『生物はなぜ死ぬのか』の著者で大量絶滅時代の到来を予測されている小林武彦東大教授らの資料によるものだが、寿命がプラトーに近づいているのがわかる。

吉永小百合さんが主演の「いのちの停車場」の一般公開に先行して、上映会（5月12日）の案内が届いたが、新型コロナ禍のため延びに延びて半年後の11月になってしまったため、一般公開が終了する直前に友人と観ることにした。吉永さんが初めて、医師役に挑戦された作品で在宅医療の普及推進に向けて、本映画の開催に北海道医師会が協力しようという趣旨の一環で参加させていただくこととなった。

この映画に登場する患者さん方は、癌末期患者3名、最新の幹細胞治療を希望する頸髄損傷者、そして、最近急増している誤嚥性肺炎を繰り返し、胃瘻で栄養補給している老妻を看取る年老いた夫と多岐にわたる。この5名の患者さんの状況を簡単に記してみると、以下のようになる。

10年以上パーキンソン病を患い、誤嚥性肺炎を繰り返し、半年前から胃瘻から栄養を補給している老々介護の夫婦。ラグビーの試合中のタックル事故で第5頸髄を損傷し、四肢麻痺を呈したIT企業の社長で、最新の幹細胞治療を希望している。手術不能な膵臓癌が肺に転移したステージ4の末期進行癌患者。元厚生労働省統括審議官で化学療法を含む積極的治療を拒否し、緩和ケア中心の治療を選択した。腎腫瘍が肝転移したステージ4の小児癌患者で6歳の女の子。肺にも転移し、娘の病状をなかなか受け入れられない両親。原作には登場しない人物だが、末期乳癌の女流囲碁棋士で一人娘の母親。私がファンである石田ゆり子さんが熱演していた。

多様な患者さんのショートストーリーから構成される作品であることから、深く掘り下げることが困難であったと思われる。主人公の白石医師との関係を強調するあまり、女流囲碁棋士である中川朋子とその娘との関係が希薄で違和感を少し感じた。しかし、同時並行して、父の脳梗塞後の激痛と対峙する主人公と当の本人である父親との心の葛藤を経て、共有するに至った最後の人生の閉じ方について、いろいろと考えさせられる作品に仕上がっている。

《サユリスト》と《ユリスト》を自認する私にとって心に重く残る作品であった。偶然、映画鑑賞会前に吉永さんと写真を撮っていただく機会を得た。ツーショットではなかったが、吉永さんとたまたま一番近い位置に私がいる写真を配給元の東映カメラマンに撮っていただき、その写真を書斎に飾ることができた。私の両隣におられたF元副会長とM常任理事の顔を干支である寅の顔で隠した写真の年賀を多方面の方々に送った。両先生の逆鱗に触れそうで寿命の縮む思いがする新春であった。